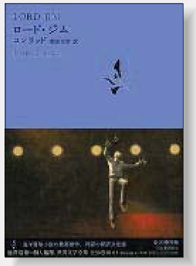
BOOK review　■　翻訳書書評

ジョゼフ・コンラッド 作
柴田元幸 訳

『ロード・ジム』

（「池澤夏樹＝個人編集 世界文学全集」Ⅲ-03）



心地よさだけに傾かぬ文学の時代

学生の半数がオースティンを扱った演習が終わると、男性作家を読んで一人バランスをとる。ディケンズ、サッカレー、ハーディなどヴィクトリア朝を代表する男性作家は、意外なことに「竹を割ったような」男性作中人物に乏しく、コンラッドあたりまで下ること一度ならず。こうした折、コンラッドをヘミングウェイ、グリーン、フィッツジェラルド、フォークナーと並べて紹介する訳者あとがきを読み、穿った気になる。コンラッドの世界は端正な顔立ちの少年時代とは裏腹に、誤解を承知で言えば、男性が全面に出る。ナイポールが『エバ・ペロンの帰還』でコンラッドにからむのも納得がいく。愛憎だ。

コンラッドで際立つのは回収という言葉でくくれる筋立てで、ヘンリー・ジェイムズ風に言えば「モンスター」的な**19**世紀作品群より、すっきりしている。たとえ『オールメイヤーの阿呆宮』で「宝」が見つからなくとも、外から見れば回収が成立していると映るし、『青春』などマーロウものは、マーロウが人に体験を語るという構図自体、作品が回収に依っていることの証左となる。語り手は生きのび、今、人にものを語っているのだから。

コンラッドは、ディケンズが『われらが共通の友』で物の循環にこだわったあとも、どこかのデスティネーションに向かう近代を絵に描いたような作品を出し続けた。結果、それが作家を**19**世紀とモダニズムの間に位置づけ、作家本人も、そして読者も、作品世界の中で引き裂かれることになる。そこで評者の関心は歴代の翻訳者がコンラッド世界の内蔵する二律背反とどう向き合ったかという点に向かう。『密偵』の訳者土岐恒二、『ロード・ジム』の初訳者鈴木建三。苦渋の滲む訳文。しかしこの二律背反こそ、阪神淡路大震災、**9・11**、リーマンショック、東日本大震災を経たあとの、大仰に言えば、日本の英文学の方向性を示す。**F・R・**リーヴィスが一時期『偉大なる伝統』で英文学カノンを名指ししたときには、コンラッドは行儀よくオースティン、エリオット、ディケンズとともに陳列されていた。もっともこの当時から日本の英文学受容の多層的行儀よさに飽き足らなかった紹介者たちはコンラッドに向かった。正統あっての異端という構図を承知で、コンラッドに酔った。

現在、コンラッド的な意味で、あるいはドストエフスキー的な意味で、本質的問題を忘却の淵に沈めておくことがかなわなくなった時代にあっては、オースティン、エリオット、ディケンズは言うに及ばず、**18**世紀の一見微温的作品群も、**20**世紀の一見ものを考えているかに見える作品群も、新たなるカルティヴェーションの網の目から逃れられなくなった。見た目に端

正な英文学が空々しさを露呈し始めた。観劇に向かう王族の車がロンドン市中で取り囲まれる。各地で暴動がおこる。過半数を遥かに超えた人々が英国を出たいという。そうした**21**世紀、「パパ、ポテイトーズ、プルーンズ、プリズム」をリトル・ドリットに教え込むジェネラル夫人もどきの姿勢、つまり醜悪でない部分にのみ目を注ぐという姿勢は意味をなさない。

そこでコンラッド。コンラッドが先の陳列ケースを出て、全集のなかでフランツ・カフカ、アルベルト・モラヴィア、エイモス・チュツオーラ、イタロ・カルヴィーノと並ぶ。コンラッドが、故意か時代の制約か、回収し残した問題、たとえば視点保持者のある種の思い込みという問題さえも、複数当事者が金縛り状態の今日の多元社会にあってむしろ事態の打開につながる場合すらある。評者は鈴木訳、ペンギン版、柴田訳、そしてキンドル版と、都合、四回『ロード・ジム』世界を旅した。毎年ドストエフスキーを読み返し、自分の感性の鈍摩していないことを確認する人がいるというが、今という時代がコンラッドをそのような文脈で語りうる作家にした。われわれの経験がある意味で不幸にも作品に追いついてしまったということだ。もちろん訳者たちはとうの昔に追いついていたのだろうが。評者は新訳の訳者と同時代の空気を吸い、その訳文に、コンラッドの見たもの、文字としてのこされたもの、訳者がその背後に見たもの、訳者の再構築物としての本書の四者が絡み合う姿を見て、滑らかな日本語とは裏腹に、各所で受容史を考えるに及ぶほどの感慨に耽った。ならばそうした事情から解き放たれた読者は。訳者は展開する複数のタブローを前に、その過去と未来の訳業という無数の旅を重ね合わせる。（河出書房新社、**2011**年**3**月、四六判変型**480**頁、**2,600**円）　——栂　正行（中京大学教授）